

栄花物語

映画文学人生論

山本周五郎 (1903-67)

『栄花物語』 (1953) 「週刊読売」

『正雪記』 1953-56) 「労働文化」

『縦ノ木は残った』 (1954-58) 「日本経済新聞」

『青べか物語』 (1960) 「文藝春秋」

もう隠退するがいい。やるだけの事はやったではないか。

由井正雪、原田甲斐、田沼意次。この三人は日本史の通説では江戸時代の悪人である。正雪は慶安の変で幕府転覆を企てた首謀者、原田甲斐は伊達騒動の陰謀の黒幕、そして田沼意次は賄賂を横行させる腐敗政治を主導した老中。

山本周五郎は歴史解釈を見直し、新しい視点にたった小説で悪人を善人にひっくりかえした。歴史的人物の評価は時代によって上下するが、由井正雪はともかく、原田甲斐と田沼意次については今や山本周五郎の解釈の通り善人説が優勢になっているように思われる。

『栄花物語』の田沼意次は質素な暮らしをしていて、賄賂などとらない。通説では名門の旗本佐野善左衛門の系図をとりあげて、田沼の系図にしたとされていたが、この小説では逆に佐野善左衛門のほうが、奏者番の地位を得るために自ら系図を賄賂として贈ろうとして断られ、逆恨みして意次の息子を殿中で刺殺したことになっている。

ではなぜ田沼の悪政という評判が歴史の通説になったかというと、田沼意次は悪化した幕府の財政を改善するために積極的な経済政策を推進し、いわゆる重農主義から重商主義へ転換をはかろうとした。それが松平定信ら保守派の反発をかい、田沼の悪政を強調する宣伝活動や世論操作が展開されたからだ。歴史は勝者によってつくられる。



栄花物語

映画文学人生論

意次が推進しようとした経済政策とは、たとえば、絹物会所、金銀会所、貸金会所の設置、印旛沼・手賀沼の干拓、蝦夷地の開発など。いずれも幕府の財政改革に寄与しそうな政策だが、すべて保守派の反対によりつぶされた。

「もう隠退するがいい。やるだけの事はやったではないか」と、意次は將軍家治から引導をわたされ、老中を罷免されてしまった。家治は意次を支持していたが、かばいきれなくなったのだ。

代わって政権をにぎった松平定信がいわゆる寛政の改革を推進したが、その実態は農民から年貢をとりたて、商人には御用金や冥加金を課すという財政のしくみを変えず、昔ながらの勤儉節約を奨励するもので、経済改革とはいえない。

『栄花物語』には田沼意次の悪口を書いた作品で評判をとった青山信二郎という旗本くずれの戯作者が登場する。信二郎は金儲けのためにやっているのだが、裏では彼にそれを書かせている黒幕がいた。その黒幕が夕顔の少将とも呼ばれる松平定信だ。

ところが、信二郎はやがて真相に気がつき。田沼意次の側に立つようになる。勘定吟味役に取り立てられた河井保之も田沼意次の不正の事実をつかもうとしてみかめず、信二郎と行動をとる。二人は裏切者として破滅する運命にあった。

白河の清きに魚も住みかねて

もとの濁りの田沼恋しき